# 青嵐に散る

伽藍

――まずは、この短い話の登場人物の紹介といこう。

市内、某ファーストフード店。時は平日の午後五時半、いつもと変わりない放課後。そんな中、テーブル席を陣取る四人組がいた――私と、その友人達だ。別に、学校から程近いこの辺りでは珍しくもない光景である。
視界の広い二階席、外は快晴。開放的な窓からは、雑然とした街が見下ろせた。ごちゃごちゃと玩具箱のような街並みを、同じように人形めいた人々が歩いている。
やはりというべきか、圧倒的に高校生が多い。そんな光景を、私はぼんやりと見下ろしていた。ちらほらと見慣れた制服も視界に入る。私の通う、さつきヶ丘高校の制服だ。
私の名前は、東鬼志乃。名字が少しばかり風変わりである以外には、何の変哲もない高校二年生だ。長い髪を、纏める事もせず流れるままにしている。
「……ちょっとシノ、聞いてる？」
横から不満そうに言われて、私は仕方なく顔を戻した。隣に座っている少女は、親友の泉澄桜子。可愛らしい名前に相応しく、ちょっと見ないくらいの美少女である。小首を傾げるとショートの黒髪が揺れて、そんな些細な仕草さえ実に愛らしいのだ。
親愛なる友に、私は適当に頷いた。
「あぁはいはいうんうん聞いてた聞いてた、ヨシダ君だよねへえぇへえぇ偉いね凄いね面白いね。……で、何の話？」
「聞いてねぇし！」
私の台詞に何故か爆笑したのは、正面に座る少年だった。名前は忍海圭。桜子と並べばそれはもうお似合いの美男美女カップルに見えるだろう、こちらもなかなか見ないレベルのイケメン君だ。中学の頃から彼と同じ学校である別の友人によると、バレンタインには毎年自己新記録を更新し続けているらしい。尤もお似合いの美男美女は、残念ながら付き合っているという訳ではないのだが。
「しかも、ヨシダ君じゃなくてサトウ君だよ……」
控えめに言いながら苦笑したのは、常磐深晴。前の二人と比べると、失礼だが何故一緒に行動しているのか判らない――それは勿論、私もそうなのだが――、ごく平凡な顔立ちの少年だ。彼は私の右斜め前、桜子の正面に座っている。
この三人が、私が高校でよく一緒にいる仲間だった。桜子と深晴は幼馴染だが、他は全員、去年高校に上がった時に同じクラスになってからの付き合いだ。二年生になっても引き続き全員クラスメイトであるのは、素直に喜ばしい。学年が変わって一ヶ月と少し、不器用な人間はまだクラスに馴染めずに苦労しているのだから。元々コース制で、同じクラスでも他の学校に比べれば授業をともに受ける機会が少ないというのもあるかも知れないが。
彼等の言うようにさっぱり話を聞いていなかった私は、三人に見詰められて眉を上げた。何だ、この空気。
「サトウもイトウもカトウもゴトウも一緒だろ、ならヨシダも一緒だ！」
「いやいやいや、全部違うから」

「こうしてシノがクラスメイトの名前を全く覚えていない事実は証明されたのであった、まる」
　桜子と圭に言い返されて、私はぐりっと首を回した。……ら、深晴がびくっと体を震わせた。失礼な反応である。
「トキワ！」
「は、はいっ」
「君は私の味方だろ、そうだろ？　サトウもイトウもカトウもゴトウもヨシダもヤマダもデンキもゴタンダも変わらないよな？」
「おい、増えたぞ」
「しかも変なのが混ざったわ」
　友人達が何かを言っていたような気がするが、恐らく気の所為だろう。
　凝視されている深晴はといえば、うろうろと視線を彷徨わせて困ったように眉を寄せただけだ。畜生、私の味方はいないのか！
「いや、ハラダもタハラもどうでも良いんだ」
「更に遠ざかった……」
　圭が小さく、何事かを呟いた。夢でも見たのかも知れない。
「――で、そのナカムラ君がどうしたって？」
「もうわざとやってるでしょ、シノ」
　処置なしとばかりに桜子が首を振る。圭がくつくつと喉の奥で笑った。
「いや、だからサトウがツカモトに告られたらしい――って話。こんだけ説明すんのに、何で遠回りするかなぁ」
「コクル――告発か！　何をやったんだ、あいつ」
「告白です！　念の為に言っとくと、罪とか罰とか関係ない感じの告白な！　愛とか恋とかいやんらめぇな感じの告白な！」
「そ、そうか」
　私は圧され気味に頷いた。圭は完全に面白がっているようだ。
　進級から一ヶ月――まだ馴染めずに苦労している人間もいれば、新たな出会いに青春の迸るうんちゃらをうんちゃらしている人もいる訳だ。若さって凄い。
　告白といえば、と私は思い出した。そういえば、この時期は桜子と圭にとっては告白ラッシュでもあるのだった。判り易い美少女やらイケメンやらが恋人も作らずふらふらしているのに逆上せ上がって体当たりし、玉砕する生徒は枚挙に暇がない。去年はそれで、随分と楽しませて貰ったのだ。
「君達にとっちゃ、珍しくもないだろ、告白なんて」
「毎年苦労してるよね」
　深晴は苦笑し、桜子と圭は顔を顰める。特別に嫌な思い出があるという訳ではないそうだが、単純に時間を取られるのが面倒臭いらしい。私は告白する側の人間に同情するね。
「あと二、三週間もすれば落ち着くだろ。それまでの我慢」
　完全に他人事である私は、毎度毎度呼び出しを受けて嫌そうに腰を上げる二人を見送るだけの

簡単なお仕事です。そこ、寂しいとか言うな。
　斯く言う今日も放課後に呼び止められて、圭一人が後から合流したのだった。校内抱かれたい男ランキング一位は伊達ではないらしい――ところで誰だ、こんなふざけたランキングを作ったのは。教師は止めなかったのか。
　正面の同級生を、まじまじと観察する。確かに顔は整っている、と思う。
「……何だよ」
　圭は居心地悪そうに身動いだ。顔は良し、成績は中の上から上の下、スポーツ万能でさつきヶ丘高校男子バレー部では一年の頃から早々にスタメン入りしている。成る程、まさに女子が憧れるには絶好の『王子様』という訳か。
　少年のトレイから勝手にポテトを攫いながら、首を傾げる。
「……ま、私の趣味じゃないけどな」
　寧ろ――。
　呟きは、誰の耳にも届かなかったらしい。怪訝げな三人の視線から逃れるように、私は再び窓の外へ視線を移した。

天気が良かった。きっかけなんて、たったそれだけだ。
天気が良くて、昼休みで、桜子は委員会の仕事だった。男子は男子の集団で食べているから、基本的に私は昼ご飯を桜子と二人で食べている。さっさと食べ終わって委員会に向かった友人に置き去りにされて、半端に余った時間をどうしようかと考えた。
元々クラスメイトのメンバーとはまだそこまで親しくなった訳ではないし、偶々その時教室に残っていたのは、自分と折り合いの悪いグループだった。男子はいつもどこで食べているのか、教室にはいないので深晴達も当てに出来ない。さて他のクラスの友人でも引っ掛けるか、それとも大人しく読書でもしているかとちょっとの間考えた、そんな時だった。
呆れる程に晴れ渡った空が、私を惹き付けた。それはほんの一瞬の、多分白昼夢みたいなものだったのだろうけれど。その蒼に誘われるように、私はふらりと外に出た。
だからそれを見付けたのは、本当に、ただの偶然だったのだ。
滅多に人の来ない中庭は、私にとってお気に入りの場所だ。廊下側の窓が面しているのだが、わざわざ立ち止まって覗き込むような物好きは少ないので人目を気にする必要もない。木と花と小さな池と、それから昼寝に最高のベンチがあるだけだ。
時期は麗らかな五月、気候的にも、外でのんびりするのにちょうど良い。私は時々そうするように、上履きのまま中庭に足を踏み入れた。
特に気に入っている日当たりの良いベンチに向かう。奥まった場所にあるから、ただでさえ人通りの少ない一階の廊下からの視線も、全く気にする必要がない。
昼休みの残りは三十分と少し。どうせだから、ぎりぎりまで寝て行こう――そのまま寝過ごしても、それはそれで構わない。
そんな事を考えながら歩いていた私はだから、事態に気付くのが少々遅れた。何人かの声――男子生徒、か？
内心で首を傾げながら、更に進む。一人の少年を、三人の柄の悪そうな少年が囲んでいる光景が、眼に飛び込んだ。
おいおいおい。
「……わぁ」
あまりに判り易いかつあげ場面に、私は思わず笑った。いやだって、笑うしかないだろ。このご時世にかつあげとか！　バイトしろ、バイト。
暫し、どうするか考えた――勿論、このまま見なかった事にして教室に戻るか、愛と勇気を振り翳して助けに入るかだ。結論はすぐに出た。
誰が行くか、面倒臭い。
あぁでもと、踵を返す前に思い付いて私は携帯を取り出した。四人とも、こちらに気付いていない。写メでも撮って生活指導の――えぇとほら、何と言ったっけ。あの、痩せこけた熊みたいな先生にでも見せてやろう。心優しい私からのせめてもの餞別である。
強く生きろよ、少年。
囲まれている方の誰かさんに、心の中でそう投げ掛けて今度こそ戻ろうとした私はしかし、足を止めざるを得なかった。

「ーーす、本当にもう持ってないんだ……！」
　とてもとても聞き覚えのある、その声によって。
「……」
　くるりと振り返って、集団を凝視する。体格の良い少年達にに遮られて、真ん中の生徒は見えない。しかし、今の声は、どう考えても。
　私は、嘆息した。
　ずかずかと、四人に近寄る。悪役な三人は、いかにも反抗的に髪を明るく染めている。そんなの今時流行らないよ？　ねぇ。
「Hola」
　才軽い感じに、私は声を掛けた。驚いたのだろう、三人ががばりと振り向く。本当に、全く気付いていなかったらしいーーかつあげされていたのは、やはり予想通りの生徒だった。
「やあ、青少年。お金が欲しいなら働きなさい。就職するのに、バイト経験なんて実は何の役にも立たないけれど、まぁ思い出作りくらいにはなるんじゃあないかと、思うよ。それと髪を染めるなら眉にも色を入れた方が良いんじゃないかな、正直見苦しい」
　ちらりとネームプレートを見ると、そこに書かれた線の色から同じ二年生である事が判った。さて、こんなおめでたい生徒、果たしていただろうか。
「……はぁ？　いきなり出て来て意味判んねえ事言ってんじゃーー」
「シゲ、止めろって」
　こちらに踏み出そうとした一人を、隣の少年が止めた。シゲって、シゲマツさんだろうか、シゲルさんだろうか。
　下らない事を考えながら、私はにっこりと笑った。
「うん、案外紳士的だね。とても素敵だ。身形を整えると、もっと良いな」
「……そりゃどうも」
　どうやら毒気を抜かれたらしかった。いきり立っていた一人も、他の二人が苦笑するだけなのを見て渋々矛先を収めている。
　うんうん、平和的な解決が一番だ。ここで退いてくれるなら私も、先程撮った切り札を使う気はないしね。
「じゃ、失礼しましたぁ」
「あぁ待って、こいつから巻き上げたお金を返してから行けよ。別に他の奴ならどうでも良いんだが、彼は私の友人でね」
「ヘイヘーイ。俺等、紳士だしね」
「そうそう、紳士だしね。女の子には優しくしなきゃね」
　あっさりと言いながら、差し出された財布を受け取る。まだ不満げな一人を宥めながら離れていく暫定不良少年達の背中を見送ってから、私は残った一人に視線を移した。
「ほら」
「え、……へ？」
「財布」

　取り戻した財布を返してやる。被害者の少年――常磐深晴は、慌ててそれを受け取った。
「ご、ごめん、有り難う……でも、危ないよ」
「別に、危なくないよ。ああいった手合いは、無闇に萎縮すればするだけつけ上がるものなんだ。女子に手を上げる程、イカレた連中にも見えなかったしね――全く、愛らしい事じゃないか」
　くつくつと喉を鳴らして、私はそう言った。しかし深晴は、複雑そうな表情を消さない。何だろう、まだ何かあるのだろうか。
「ごめん……」
「うん？」
「なんか僕、情けないよね……」
「情けない？」
　きょとりと首を傾げると、深晴はどうやらますます落ち込んで仕舞ったらしい。
「だって、シノちゃんに助けられてさ――一応、男なのに」
「男？　勿論、君の性別がメイルなのは事実だが、その物言いは納得出来ないな。基礎能力が違う以上、男女による役割の分担は大いに賛成だけれども、今の状況においてそれは当て嵌まらなかった気がするよ」
「あぁいや違う、そうじゃなくて……そうじゃ、なくて……」
　何故かどんどん沈んでいく友人に、私は慌てた。何だ、私が何かしたのか。何か、間違ったのか。
「えぇと、トキワ、さん……？」
「僕も、ケイ君みたいに男らしかったら良いのに……」
「……」
　圭みたいな深晴を想像しようとして、私は己の想像力の限界を悟った。――というかそもそも、それは既に常磐深晴じゃないだろ。
「えっなに、初耳。君、オシミに憧れてるの？」
「そ、そうじゃなくて……いや勿論、ケイ君は格好良いと思うけど」
「……てらいなく他人を褒められるのは、間違いなく君の美徳だよ」
　呟いた私の言葉は、はっきりとは届かなかったらしい。不思議そうな顔をした友人に、ふむと顎に手を当てた。
　ある種の確信を抱いて、問う。
「要するに君は、自分に自信がないんだろ」
「自信があったら、苦労しないよ……」
　がっくりと肩を落とす。私はちらと、舌で唇を湿らせた。
「ほうほう、そうか。だったらさ」
　ものの序でのように、何でもない調子で。
　自分の声は、掠れてはいなかっただろうか。
「彼女でも出来たら、ちょっとは変わるんじゃないか？」

……例えば、私とか。
提案した私に、深晴はぽかんと顎を落としたのだった。

私が押し切るような形で深晴と付き合い始めてから、二週間が経った。
因みに、この事は誰にも言っていない。隠している訳ではなく、単に気恥ずかしくて言い出せなかっただけだ。今までずっと男になんて興味がありませんという顔で通して来たのだから、どんな顔でそれを言えば良いのか判らない。桜子にも、圭にも、だ。だから端から見れば、私達はいつもと変わらない四人組だろう。
密かに深晴からバレるのを期待していたりしたのだが、彼は彼でどうにもタイミングを逃しているらしい。結局、そのまま二週間が過ぎて仕舞っていた。
因みにその間、恋人らしい事はナシ。全くの、ゼロ。土日だって二回来たのに、誘われる事はなかった。多分、思い付きもしなかったのじゃないか。
要するに、変わらないのだ――それはもう見事なまでに、オツキアイをする前と状況が変わらないのである。
深晴の性格を考えても、それは仕方ないだろうと理解している。そもそも彼は、私の事を元々女として好きであった訳ではないのだし。私の提案に流されるように、お試しで付き合っているだけだ。
そう、それだけだ。私はそれを、とてもとてもよく理解しているのである。
だから、こちらから行動に移す事にした。多分デートのお誘いなんて待っていたら、そのまま季節が巡って仕舞う。
ベタと言われようが何だろうが、何らかのきっかけは必要だ。だから知り合いに貰ったと嘘を吐いて、用意した映画の前売り券を差し出した。我ながら、ちょっとどうかと思うくらい古典的な手法だった。
アクションは深晴があまり好きではないし、こてこてのラブストーリーでは私が白ける。初っ端からホラーというのもあざとい気がするし――そもそも私がそんなもので怯える訳はないというのが、自他共通の認識である――、ミステリーは好みが分かれるだろう。考えた末、コメディ調の青春ものを選んだ。この際、無難ならば何でも良い。問題は映画の内容ではない、その前後だ。
半ば強引に、次の日曜日に約束を取り付けた。勢い任せな言葉だったが、深晴は照れながら了承してくれた。たったそれだけで、少女漫画のヒロインのように胸が高鳴ったのはここだけの話である。
だから詰まり、その時私は浮かれていた。親友の桜子に、深晴と付き合い始めたのだと言おうと思い立つくらいには。
今日の放課後、こっそりと教えよう。私はその時まで、そう決めていた。

そもそも私と桜子は、全くタイプの違う二人組だ。
偏屈で利かん気で男勝りと言われる事の多い私と、女の子らしくて可愛くて明るくて優しくてリーダーシップのある桜子。共通するのは、気が強いという部分くらいだろうか。
お互い以外では連むメンバーも全く違うし、何故ここで友情が成立したのだろうかという程度には噛み合わない組み合わせなのである。特に中高生なんて、周囲に自分と同じ見識を求める傾

向の強い年頃だろう。互いの違いを良さと認め合える程、成熟していないのだ。
　それでも間違いなく、私達は親友同士だった。考え方の違いで腹が立つ事なんて数え切れないし、それは向こうも同じだろう。些細なきっかけで、簡単に崩れて仕舞う友情かも知れない。互いになんとなくそれを察しながらも、ずっと一緒にいた。
　私から見て、桜子はとても素敵な少女だった。非の打ちどころのない美少女であるというのは勿論だが、見掛けだけではない。女性らしい、守りたくなるような愛らしさを持ち合わせている。それでいて気弱という訳ではなく自分の意見はしっかりと主張するし、場合によっては真っ向から人と対立する事も厭わない。細やかな気遣いを忘れないし、進んで人の手助けをする優しさもある。バドミントン部に所属していて、新人戦でも随分と良い功績を残したらしい。おまけに品行方正な優等生で、教師からの信頼も厚かった。
　そうだ、知っていた。自分は何もかも、彼女に劣っていた。多分、私の事を桜子の引き立て役くらいにしか思っていない人間だって、少なくはないだろう。
　別に、全く構わなかった。何の変哲もない自分が側にいて彼女の魅力が際立つのならば、存分に利用してくれて構わない。その程度には、私は彼女を気に入っていたのだ。
　けれど、そう。
　私は彼女に、コンプレックスを抱いていたのだろう――恐らく。否、現在進行形で。
　親友同士として側にいて、誰よりも近くにありながら、私はきっと彼女の事を直視出来ていなかった。あまりに眩しくて、眼を逸らして仕舞っていた。だからこんな簡単な事に、気付かなかったのだ。
　ずっと、ずっと。
　きっかけは、些細な事だった。放課後、いつ言い出そうかと、どきどきしながら時を計っていた。多分無意識の内に彼女を観察していたのだろう、右手の人差し指に貼られていた絆創膏に気付いて、私はことりと首を傾げた。
「……あれ、イズミ？」
「何？　シノ」
「どうしたんだ、人差し指」
　ついと指で示すと、桜子はあぁと声を上げた。己の右手に視線を落としたその瞬間の表情に、私は刹那、声を失った。
「ちょっと、切っちゃってさ……可愛いでしょ、この絆創膏？　ミハルに貰ったのよ。あいつ案外、子供っぽいところあるんだから――」
　言いながら、左手の指で絆創膏をなぞる。鮮やかなピンク地に、小学生の、それも低学年が好んで使うようなキャラクターものの絆創膏だった。この年になって、そんなものを見るとは思わなかった――半ば逃避のように、私はそう考えていた。
「ほんの掠り傷だから、大丈夫って言ったのに。無理矢理押し付けて来たのよ。心配しちゃって、バッカみたい」
　そう言う、――横顔。
　薄く、それこそ名前の通り桜のような色にほんのりと頬を染めた、表情。

　その、瞳が。
「昔っから、そうなのよね。お人好しで、優しくて、冗談みたいに素直で。――そう、昔から」
　ああ、そうだ、二人は確か、幼馴染だった――。
　絆創膏を見下ろす、視線が。
「いい加減、ちょっとは男らしくなりなさいって、いつもそう言ってるんだけど。ね、シノもそう思わない？　シノ、――シノ？」
「……あ、あぁ」
　何度も呼び掛けられて、漸く頷いた。どうしよう、と思った。
　どうしよう。
　私は今、多分とても混乱している。
「そうだね。まぁけれど、そのままでも構わないのではないかな。それがあの、常磐深晴という少年であるのならば」
　言葉はいつも通りに、すらすらと口から流れ出た。桜子は、気付かなかっただろうか。――気付かれて、いないだろうか。
　あぁ違うんだ、だって、ねぇ、気付かなかったんだ。
　だって、何で、そんな、そんな、――愛おしそうに。
　私よりも百倍くらい優れている、誰からも好かれる可愛らしい桜子。私の知る全ての友人の中で、一番素敵な人。
　なぁ、一体。
　勝ち目なんて、どこにあるんだ。
　コンプレックスの塊みたいな、中身も外見も可愛くないこの私が。
「そうね、まぁ男らしいミハルなんて、ちょっと笑っちゃうわよね」
　くすくすと楽しげな、声が。
　とうとう、私は立ち止まった。両手で顔を覆って、歪んだ表情を隠す。
「……シノ？　ちょっと、どうしたの、シノ？」
　慌てたような、親友の声。違う、違うんだよ。
　本当に、知らなかったんだ。
　君が、――深晴を、好きだなんて。
　そんなこと、まったく。
「……いや」
　顔を上げて、私は微笑んだ。現状、深晴は私と恋人同士という関係にある。つい先程まで、それを彼女に伝える心算でいた。
　けれど、そう。
　――伝えようとしていた事実は、どうしても私の喉から出て来なかった。
「何でもないよ。ちょっと、寝不足なだけさ。心配させて悪いな」
　本当に何でもないように、肩を竦めてそう言った。
　……最低だ、私。

　そして数日後の、今日。
　映画を観終えた私達は、近くのカフェテラスでティータイムと洒落込んでいた。晴れの日曜日、絶好のデート日和だ。
　コーヒーを一口含んで、私は向かいの相手を見遣った。内容に満足したらしい深晴は、のほほんとした顔でアイスショコラを飲んでいる。
　あぁ、良いなぁ。
　私はしみじみと、そう思った。けれど同時に、確かに走る、痛み。
　身体的なそれではない、例えば見えない何かに胸でも突かれたような痛みだ。
　私は眼を閉じて、数度深く呼吸した。
「……汚いなぁ」
「え、なに？」
　呟きは、はっきりとは聞き取れなかったらしい。きょとりと首を傾げた深晴にほっとして、私は肩を竦めた。
「私もまた人間の一人であった、という事さ」
「シノちゃん――」
「まぁ尤も、それを悪い事だとは微塵も考えていないんだが」
　人間であるという、その事実くらいは。
「けれど、綺麗でありたいね」
　それがどんなに難しい事であるのか、判っていても。
　相手が困惑したように眉を寄せている事に気付き、私は早々に話題を切り上げた。もう一口飲んで、にっこりと笑う。
「まぁ、下らない話はこれくらいにしておこう。今日は楽しかったか、トキワ？」
「あ……う、うん。有り難う、シノちゃん」
　二度、三度瞬き、深晴は慌てて頷いた。それから、少しだけ頬を緩める。性格が滲んで出たような、淡くて優しい笑みだった。
「とっても、楽しかった。あんまり映画なんて観ないから、新鮮だったし」
「……そう、良かった。君、映画はそんなに見ないのか？」
「機会がないと、なかなかね。休日は基本的に、家にいるし」
　確かに、休みの日に街をふらふらしているイメージはあまりないな。ぼんやりとそう考えて、ふと思い付いた。
「じゃあ今度は、博物館にでも行ってみるか？　動物園とか、水族館とか、美術館とか。あぁそれから、自然公園とかどうだろう。科学館も近くにあった筈だけれど――」
　言葉が、途中で途切れた。
　深晴が、ぽかんとした顔でこちらを見ている。その視線で、私は我に返った。自分が何を言っていたかに気付く。
　かっと、顔が赤くなるのが判った。
「あ、いや、そうじゃなくて……いや、そうじゃなくないんだが」

こんな、当然みたいに、――次の、約束を。
どこまでだろう、と思った。一体どこまでが、私が踏み込んで許される範囲なのだろう。
親しいクラスメイトとして。
名ばかりの恋人として。
近くに在るものとして。
どこまでが。
固まっていた深晴が、漸く再起動してあわあわと首を縦に振った。
「う、うん、別に嫌とかじゃ――」
二人して、何をしているのだろう。
カフェでお互い赤くなって、まるで安っぽい青春ドラマのように。
馬鹿みたいじゃないか。
そう思ったら、自然と笑いが込み上げて来た。深晴は相変わらず、どうしたら良いのか判らないというような顔をしている。
湧き上がる衝動のまま、私はくすりと微笑もうと――した。
そんな時だった。
とてもとても聞き覚えのある声が、耳に滑り込んだ。
「――シノ……？」
柔らかく甘い、ソプラノ。耳に心地の良い、ずっと聞いていたくなるような優しい声だ。
どきりと心臓が跳ねた。その声も、声の持ち主も、私はよく知っていた。そう、――とてもよく、知っていた。
ぎょっとして、座ったまま振り返る。彼女はどうやら、偶然友人達とこのカフェに入ったらしい。少女達のグループの中の一人が、こちらを凝視していた。
私の大切な親友殿、――泉澄、桜子。
「イズミ……」
「シノ、――それに、ミハル？」
「イズミちゃんっ？」
驚いたような、深晴の声。私は、振り向く事が出来なかった。
名を呼んだきり言葉を失って見詰めて来る少女、呆然と立ち尽くす姿。
浮かんだ表情を、私は暫く忘れる事が出来ないだろう。

　微妙な空気のまま別れた日曜日から三日経った、水曜日。昼休み、私は深晴と屋上で弁当を広げていた。
　二人だけで、屋上で食べ始めたのは今週の月曜日からだ。なんとなく桜子と一緒にはい辛くて、逃げ出すように教室を出た。それに何でか、彼も付いて来たのだ。
　無理をしなくても、良いのに。
　何も言わぬままこちらを気遣う彼に、その台詞を言う事はどうしても出来なかった。
　ぽつぽつと会話を交わしながら、一緒にご飯を食べる。さつきヶ丘高校では基本的に屋上を開放していないので、殆ど独占状態だ。基本的に、というのは、屋上の扉がちょっと細工をすれば簡単に開くものである事を一部の生徒が知っていて、それを私も密やかに活用しているからである。
　どうやら今日は、本当に誰も先客はいないらしい。二人で片隅に陣取って、並んで座り込んだ。
　ここ数日、彼はずっと心ここに在らずだった。それを、私は知っていた。知りながら、何も言わなかった。
　何も、言えなかった。
　多分、私はどこかで予想していたのだろう。どこかで、判っていたのだろう。
「……シノちゃん」
　だから固い声でそう声を掛けられた時も、私は普段の調子で返す事が出来たのだ。
「うん？　どうした、トキワ」
「その、……ね」
　何度も何度も、口を開いて、閉じて、言おうとして、口籠って、躊躇って、迷って、それから。
「僕――」
　常磐深晴は、こう言った。
「イズミちゃんに、告白された」
　その、唐突な台詞に。
「はっ、――」
　私は、笑った。
　阿呆じゃないのか、この子は。
　何故だろう。何で、言っちゃうのかな。何で、隠そうともせずに、馬鹿正直に、教えてくれて仕舞うのだろう。
　知っている。これが、常磐深晴だった。
　優しくて、誠実で、――きっと、嘘を吐く事なんて思い付きもしないのだ。同じように、黙ったままでいる事も。
　そんな、ばかみたいに。
　こんな世の中じゃあ、どうしようもなく生き辛いだろうに。
　不器用で、かわいいひと。

　笑い出した私を、どう思ったのだろう。慌てたように、少年が首を振る。
「ち、違うよ！　多分、イズミちゃんの勘違いだと思うんだ」
「……ほう？」
　その言葉にこそ、私は驚いた。何を言い出すのかと、相手をまじまじと見詰める。
「だって、そんなの……僕とイズミちゃんは、幼馴染だけど、だから――僕なんかを、好きだなんて」
　問えながら、それでも。
「気の所為だと、思うんだ。僕は、こんな、鈍臭いし、頭悪いし、格好良くないし、暗いし――だから」
「常磐深晴」
　私は思わず、彼の名を呼んだ。フルネームで呼ばれて、驚いたように少年が瞬く。
　何だろう。
　腹の奥で確かに主張する、この感情は何だろう。
　くつくつと、ふつふつと。
　暫く考えて、思い当たる。
　それが怒りである事を、私は認めた。
　一瞬、くらりと眩暈がした。
「――ふざけるなよ、お前！」
　いきなり怒鳴り付けられて、深晴がびくりと肩を揺らす。構わず、私は続けた。
「それ――なに？　何なの、それ？　『僕なんか』って言ったか？　『僕なんか』って！　ふざけんな、ふざけるなよ常磐深晴！　それは君の幼馴染への、私の親友への――イズミに対する、多大な侮辱だ！　君、判ってるか？　君は今、自分じゃなくて、自分だけじゃなくて、君を認めてくれている友人も貶したんだぞ！　『鈍臭い』？　『頭悪い』？　そりゃあ君は、運動も出来ないし成績だってそんなに良い訳じゃない、そんなの知っとるわ！」
　感情のあまりだろう、息が詰まった。粘つく唾液を飲み込んで、数度深く呼吸する。
「――で？　だから？　だから、何なの？　――答えろ。だから、何だよ⁉　容姿、能力、そんなものが君の価値にどれほど影響するというんだ！　じゃあ言ってやろうか、今の君、凄く格好悪いよ。去年のマラソンでずっこけた時よりも、この前かつあげされていた時よりも、今の方がずっとずっと、何倍も格好悪い。お前、格好悪い！」
　じわりと視界が滲んで、乱暴に眼を拭った。
「イズミが君の事を、好きだと言ったんだろ。だったら信じろ、疑うな。あんたを好きだと言ったあいつと、あいつに好かれたあんたを、否定してくれるな！　想いを受け入れるにせよ、受け入れないにせよ、君はその言葉を受け止めろよ、この馬鹿！　他の誰が何と言っても、誰よりも、君が――！」
「シ、シノちゃ……」
　名を呼び掛けて、言葉を失う。私はくっと顎を上げた。
　深晴が息を飲む、気配がした。

「言ってなかったっけ、言わなかったっけ？」
　意地でも涙は流さない。少年を正面から見据えて、私は少しだけ笑った。
　鼻の奥に、小さな痛みだけが残った。
「私は君が好きだよ、トキワ。――この想いすら、君は否定するのだろうか」
「そんな、だって……」
　何事かを言おうとした少年を、ぎっと睨み付ける。相手が彼でなかったら、きっと私は殴り飛ばしていた。
「あのさ……」
　震えそうになる声音を、無理矢理に押さえ付けながら。
「君は、誰だ？　なぁ、あんたは誰だ？　トキワだろ、常磐深晴だろ！　君は、君だけは――常磐深晴に向けられる感情から、逃げるな！　あんた、自分から眼ぇ逸らしててどうすんだよ！　好意であれ悪意であれ、それは間違いなく、あんたに向けられた想いだろ!?　何でだよ、このヘタレ！　何で、何でそんな簡単な事も判んないんだ！」
　半ば叫ぶように問いを投げ掛け、深晴の胸倉を掴み上げる。肩で息をする私に、彼は少しの間、眼を伏せた。
　数秒。
　そして、――顔を上げる。
「うん。――うん、そうだね。……ごめん」
　やんわりと私の拳を解き、仄かに笑う。
　優しくて温かい、実に彼らしい柔らかな表情だった。
「有り難う、シノちゃん。僕、もう一回イズミちゃんと話し合ってみるよ」
「当たり前だ、馬鹿！　いつまでもうじうじしていてみろ、今度こそ張り倒すからな」
　ふふんと鼻で笑って、私は彼の胸を小突いた。こうして向き合ってみると、彼は確かに成長途中の少年なのだ。女である私とは、体のつくりが違う。
「ごめんね。……本当に、有り難う」
「良いから、さっさと行け」
　少しだけ眼を細めた少年に、私はそう返して、笑った。

……いや、まぁ、ね。
「判ってるんだけどさ……」
　――敵に塩を送ったに、等しい状況だって。
　その日の放課後、殆ど人のいない教室で、私は自分の机に突っ伏してどんよりと落ち込んでいた。
　教室にいるのは、二人だけだ。私と、もう一人。
「災難……とでも、言うべきか？」
　ちょっと殺意が湧くレベルのイケメン、忍海少年だった。私の前の席に、背凭れを抱えるような体勢で座っている。
　面白がるような声音にかちんとして、私は顔を上げた。くそっ、あの鼻っ柱圧し折ってやりてぇ。
「煩い、失せろ」
「おいおい、酷ぇな」
　言いながら、彼が気を悪くした様子はない。何気ない仕草で手が伸びて来て、私の長い髪を撫でていく。いきなり不用意に距離が近付いた気がして、少しだけ驚いた。勿論、相手に悟らせるような真似はしなかったが。
「落ち込んでますねぇ、シノちゃん」
「当たり前だろ……」
　結局、あのまま別れた少年を想う。
　不器用なひと。
　強くないひと。
　けれどとても、誠実で優しいひと。
　彼は、どうするのだろう。明るくて可愛くて親しみ易い、私より何倍も魅力的な桜子に告白されたという、深晴は。
　否、そんな要素など、一つもなくたって。
　桜子の前で、私は霞むだけの存在なのだろう。もう嫉妬する気も起きないくらいに、それを知って仕舞っていた。
　それでも構わなかったのだ、私は。
　私の想いなど、彼にとっては迷惑でしかないのかも知れなかった。
　だって、さぁ、だって。
　ずっと、気付いていたのだから。
　判っていたのだ。
　知っていたのだ。
　見えないフリで眼を逸らして、聞こえないフリで耳を塞いで、何でもない顔で口を拭って。
　そうだ。
　ずっとずっと、逃げていたのは他でもない、私だった。
「……知ってるっつの、バーカ」

吐き捨てた声は、掠れてはいなかっただろうか。
そうだよ、知ってるよ。出会ってまだ一年で、彼を好きになってからの期間なんてもっと短いけれど、それでも。
女の子なのだから。
恋を、しているのだから。
「知ってるっつの」
「……そうか」
再び突っ伏す私の頭を撫でる、誰かの手。そういえば傍らには圭がいるのだったと、私は思い出した。
「そうだよ。ずっと、勘違いだ気の所為だ考え過ぎだって、思おうとしてたんだけどな」
あぁ、そう、そうだとも。
知っていたのだ、気付いていたのだ、判っていたのだ。
――深晴が桜子を好きなんて、そんな、簡単な。
誰から見てもはっきりとしている、判り易い事実なんて。
知っていて、知らないフリで、友人という関係の延長のように付き合おうかと提案した。押しに弱い彼が、強引なその提案を断れない事を予想の上で。
ただ流されているだけだというのを、承知の上で。
だから。
誰よりも汚いのは、私だ。
狡いのは、弱いのは、浅ましいのは。
彼の隣で、厚い面の皮で笑い続けた、この私じゃないか。
「あぁ……、くそっ」
まさか桜子も深晴を好きだなんて、これは完全に想定外だったのだけれど。
それもこれも、今更。
何もかも。
遅くて、遅くて――笑っちゃうくらい、遅過ぎる。
「ふざけんなよ、畜生……」
圭は答えない。ただ、私の頭を撫で続けているだけだ。無責任に面白がっている訳でないのは流石に判るが、そんな気遣いさえ、今は鬱陶しかった。
手を払い除けて再び顔を上げ、少年の顔を睨み付ける。
「子供扱いすんな、馬鹿！」
「いや、子供だろ」
至極軽い調子で、彼は切り返した。
「子供だろ。お前も、――俺も。若くて、青くて、幼稚なガキだよ」
「……うっぜ」
圭らしくもない、冷静な意見だった。否、自分が冷静になれていないだけだろう。
反論の余地もない言葉に、私はそれこそ子供のような悪態だけを返した。相手はくすくすと

笑っている。よくよく観察してもやっぱりその顔は整っていて、成る程確かに、女子に人気なのも頷けるのだ。
　それでも私が好きな人は、彼ではなかったのだけれど。
「まだまだ幾らでもやり直しが利く年齢なんだよな、俺達は」
　女子の十人中七人くらいは赤面しそうな顔で、圭が私の顔を覗き込む。
「ってな訳で、仕切り直してみません？　お子様の恋愛ごっこ」
「……え、何て？」
「だから――」
　よく判らない事を言われて、私は一先ず自分の感傷よりも疑問を優先させる事にした。ことりと首を傾げた私に、少しだけ焦れたように。
　忍海圭は、言った。
「ミハルじゃなくて、俺にしとかねぇ？」
「……は？」

なんだか、随分と久し振りな気がする――こうして、友人と正面から顔を合わせるのは。
それは勿論気の所為で、実際にはほんの数日ぶりの事なのだった。自分の感情一つで捉え方はこんなにも変わるのかと、私は内心驚いた。
学校から歩いて五分、駅との間にある喫茶店での事である。誘ったのは桜子で、誘われたのは私だった。けれど桜子が誘っていなければ、きっと近い内に私が誘っていただろう。
私の手元にはアイスコーヒー、ミルクとシロップを一つずつ。桜子が注文したのはアイスティー、ダージリンのストレート。彼女はいつも、どちらも使わないのだ。
そう、知っている。そんな些細な事を覚えて仕舞うくらい、何回も一緒にお茶をしたのだから。
この、一年の間に。
ごく小さなきっかけで、簡単に壊れて仕舞うだろう。そんな、危うい均衡の上にある友情だった。
それを、私は知っていた。多分、桜子も気付いていた筈だ。
二人の注文したものが揃うまでに、会話はなかった。アイスティーを置いた店員が去ってからたっぷり時間を置いて、漸く私は口を開く。
「甘いものは、良いの？」
「うん、平気。……シノは？」
「大丈夫だよ、有り難う」
茶番のようなやりとりの後、それぞれ一口、口に含む。そこまで全部が、芝居みたいだった。
幕が、降りる。
皆様ご来場有り難う御座います、本日の上演は終了致しました。
ここから先は、舞台裏。
口火を切ったのは、泉澄桜子だった。
「付き合ってたのね、シノ。……ミハルと」
「いや――」
咄嗟に否定しかけて、何をしているのかと思い留まる。
そう、私はその事実を否定してはいけないのだ。
私だけは、決して。
「……うん、ごめん。そうだよ」
「言ってくれれば良かったのに――親友じゃない……」
その通り、彼女と私は間違いなく、最も親しい友だった。
誰よりも親愛を傾けたひと。多分、深晴に対するよりもずっと。
「言い出せなかったんだ。……悪い。悪かった」
謝ってから、あぁ失敗だったなと、ぼんやりと思った。
謝罪というのは、自らが罪を自覚している時にするものだからだ。案の定、桜子は息を飲んだ。
「……知ってたの？　あたしが、ミハルを好きだって」

「ーーー」
　ゆるゆると、首を振る。きっと、大した意味はなさないだろうけれど。
「知らなかったさ。知らなかったーー気付いてなかった。つい、この前まで。途中で気付いてーー」
　コーヒーの香ばしさを楽しむ余裕もなく、機械的に飲み下す。
「ーー言い出せなかった。どうしても、言えなかった」
「そう……」
　言い訳と受け取られても仕方ないだろう私の言葉を、彼女は信じる事にしたらしい。一つ頷いて、けれど桜子はぐっと俯いた。
「そうーーそう、なんだ……」
　ぽつりぽつりと、自分に確認するように。
　からん、とどちらかの氷が無責任に涼やかな音を立てた。やがて桜子が、喉から絞り出すように言葉を落とす。
「何それ、狡いーー」
「……済まん」
　それはその通りだったから、私は素直にそう言った。
　どうやらそれが、きっかけになったらしい。がばっと顔を上げて、愛らしい顔を紅潮させてこちらを睨み付けて来る。
「本当、狡いーー何でよ！　何で、先にーー何で、シノが！　だってーー」
　理不尽とも思えるような稚拙な罵りの後、ちょっとだけ呼吸を詰めて。
　少女は、泣かなかった。
「ずっと、好きだったのに！　あたしの方が、ずっと、ずっと、昔からーーミハルの事、好きだったのに！　ずっと、あたしがミハルの横にいたのに！　何で？　ねぇ、何で取り上げようとするの、奪おうとするの!?」
「……イズミ」
　私の呼び掛けに、自分の声が無意識に高くなっていた事に気付いたらしい。桜子ははっとしたように、大きく息を吐いた。
　半ば乗り出すようにしていた上半身を戻して、片手で顔を覆う。
「……ごめん」
　苦く、自分を笑うみたいに。
「あたし、ーー最低だ」
「まさか」
　反射的に、私は否定の言葉を吐き出していた。視線を合わせようとしない親友に、意識して落ち着いた調子で。
「アンフェアだったのはお互い様だろ。私は言った後に言わなかったし、君は言う前に言わなかった。多分、どっちも同じくらい狡いんじゃないかな。ーー勿論心情的には、自分一人を悪者にして仕舞いたい気持ちでいっぱいなのだけれど。そんな事をしたら、私はそれこそ最低になる

だろうから」
　流石に、いつものように滑らかな語り口調とは言えなかった。問えながらの台詞に、桜子が少しだけ笑う。
　私への悪意などどこにもない、酷く柔らかな笑みだった。
「有り難う、シノ」
「ーーー」
　一瞬、言葉を失う。
　あぁ、そうだ。いつだって明るくて、可愛くて、前向きで気が強くて、何より優しい。
　私と君はあまりにも違い過ぎて、だからなかなか噛み合う事がなくて、何かのきっかけで絆なんてたちどころに切れて仕舞うかも知れないと、そんな事を思いながら。
「……うん」
　それでも一年間一緒に過ごした、大好きな、彼女は私の大切な親友だった。

――あぁ、判っていたさ。
判っていた判っていた判っていたんだよ、そんな簡単な事。
彼が誰を想っているか、なんて。
ずっと。

天気の良い、金曜日だった。
私と深晴は二人、誰もいない屋上で雲一つない空を見上げている。
一瞬強い風が吹いて、私はふるりと体を震わせた。もうすっかり暖かくなったものと思っていたが、まだ油断は出来ないようだ。
放課後の学校は喧噪に包まれている。部活動の掛け声、友人と帰宅する少年少女の話し声と笑い声。それら一切から隔たった、静かな空間。
私が感情のまま深晴を叱り飛ばしたあの日から、数日が経っていた。
沈黙が、私達の間を辛うじて繋いでいた。ここ数日、深晴はずっと考え込んだままでいる。元々物静かな彼がああして自分の世界に入って仕舞えば、二人の間に会話なんて殆どなくなるのだ。
少なくとも最近の私達を見て、名目上でも彼氏と彼女だなんて思い付く人間は全くいないだろうな。自嘲気味に、そんな事を思う。
私は、笑った。
「――で？」
同じ方向を――詰まり、外のグラウンドに――向いていた体を反転させ、素っ気ない作りの柵に寄り掛かりながら、私は深晴に声を掛けた。
背中から、ぎしりと不穏な音が鳴った。お世辞にも新しいとは言えない校舎なのだ。
深晴は頑なに、グラウンドから視線を外そうとはしなかった。そんなもの、見たって面白くも何ともないだろうに。
だって、いつもの光景だ――そう、いつもの。
私達の感情など歯牙にも掛けずに、困惑など当然のように置き去りにして、日々はただ過ぎていく。
「……何、シノちゃん？」
「答えは出たの？」
馬鹿みたいに直截的な問いだった。
「――っ」
彼が息を飲むのに、私は振り向いた。深晴も体をこちらに向けたから、自然、向き合って佇むような形になる。
端から見たら、今の私達は随分と奇妙だろう。ぼんやりとそんな事を思った。
深晴はそれでもまだ、逡巡しているようだった。名ばかりの恋人の姿を観察しながら、私はのんびりと待つ構えを取った。
細い、運動などした事もないというような体躯。外に出ないのか、肌の色は女子よりも白いく

らいだ。部活は確か、茶道部だったか。なまじいつも一緒にいるのがスポーツ万能な圭だから、貧弱さが強調されて仕舞っている。
　眉は細く短く、気性を示すようにやや下がり気味の眦。この年頃の少年にしては、頬も額もつるりとしている。体質的なものか、それとも余程健康的な生活をしているかだ。
　髪の毛はやや長め。恐らくは単なる無精だろう。地毛が深い黒だから、余計に重い印象になっていた。
　ところどころに特徴はあってもそれはただそれだけで、どこにでもいる普通の少年である。
　そう、ごく普通の少年だ。
　常磐深晴は、そんな存在だった。
　何の変哲もない少年と何の変哲もない出会いをして、何の変哲もない恋をした。きっと、言葉にしたらその程度。
　深晴は二度、三度、深く息を吸って、吐いた。やがて何かを決したように、口を開く。
　そして、彼は。
「……僕ね。昔、苛められてたんだ」
　唐突な語り出しに、私は答えを返さなかった。ただ無言で、先を促す。
「小学校――何年だろ。もう、覚えてないけど。登校するのも嫌になって、大人は理解してくれなくて――死んだ方が良いかもって、そう考えちゃうくらい。味方なんて、いないと思ってた。――けど」
　問え問え、言葉を探しながら。――心を見詰めながら。
「そんな時に、イズミちゃんが――」
　その名前に、ありったけの想いを籠めて。
「イズミちゃんが、家まで迎えに来てくれたんだ。学校に行こうよ、負けちゃ駄目だよって。外で僕が苛められていたら、助けに来てくれた。ずっと、一緒にいてくれた。――本当にいつの間にか、気付いたら僕はまた皆と笑えるようになってた。何年かして、その頃に苛めてた奴等がバツの悪そうな顔で謝って来たよ」
「……うん」
　あぁ、そうだ。
　優しくて、明るくて、正義感の強い、私の自慢の親友。
　彼女の過去の行いが、自分の事のように誇らしかった。
「それでも僕はやっぱり、弱いままなんだけど。いつまでも、僕は変われるか判らないけど」
「うん――」
　普段通りの顔を、繕えているだろうか。
　ふと、そんな事が気になった。何故だろう、いつもと何も違わないのに。
「いつまでも、弱くて情けない、常磐深晴のままかも知れないけど」
　そんな事はないよ。
　君が、本当の意味で人の為に泣ける人間である事を知っているよ。心を傾けて、痛みを感じられる人間である事を知っているよ。誰よりも優しい人であると、知っているのだよ――私も、桜

子も。
　けれど私は、口を噤んだ。それはもう、私の言うべき台詞ではなくなっていた。
「それでも――」
　彼は、息を飲んだ。
　うろうろとコンクリートを彷徨っていた視線を上げ、こちらを見て、何かを言おうとして、けれど何も言わずに。
　笑え。
　誰に命じているのかも、もう判らなかった。
　ただ、笑え。
「ほう。――それで？」
「それでも、良いって言ってくれたんだ。イズミちゃん、今のままの僕でも良いって」
　拙い口調で綴る声は、小さく震えていた。
　あぁ、そうだ。
　そうだ、そうとも。知っている――私はずっと、気付いていた。知らないフリを、していただけで。
　常磐深晴の、想いの向かう先。
「もう何年も、好きだったって――それが、凄く、……嬉しくて」
　この時の気持ちを、何と言えば良いのだろう。
　悔しい、か。
　悲しい、か。
　それはある。当然だ。深晴に告白して、こんな反応をして貰える桜子が、羨ましいし妬ましい。
　けれど、それでも。
「イズミちゃんは昔から人気者で、僕なんかが一緒にいて良い人じゃないって、ずっと、そう思ってて。――多分、劣等感を持っていたんだと思う。一緒にいる事にも、イズミちゃん自身にも。けど、そんなの勘違いだって、言ってくれたから」
　泣きたかった。
「だから――だから、真っ正面から、大切だって言われて。好きだって、愛してるって――言われて。それが――」
　けれどそれ以上に、大声で笑い出したい気分だった。
「それが、なんか、とっても……嬉しかったんだ」
「――――……」
　深晴の顔はもう、可哀想なくらい真っ赤だった。
　そうだ、そうとも。知っている――私はずっと、気付いていた。
　本当は、ずっと。――狡かったのは、私の方だ。
　気付いていて、知っていて、自分の望みを優先させたのだ、私は。
　常磐深晴の、想いの向かう先。

　それが。
「……そうか」
　嫉妬はある。
　悔恨もある。
　確かに、桜子は魅力的な少女だ。それを差し引いたって、何故自分ではいけないのかという、理不尽な憤りも。
　けれど、それでも。
　悔しくて、悲しくて――それでも私は、嬉しかったのだ。
　大切な彼と彼女が幸福になれるかも知れないという、その可能性を、私は心から祝福した。
「――あぁ、判っていたさ」
　君が誰を、想っているかなんて。
　君が誰を、想っていたかなんて。
　何でもないような顔で、大した事じゃないみたいな顔で、私は君を強引に頷かせた。あの時どんなに緊張していたかなんて、君はきっと判らないだろう。多分、これからも。
　噛み合わない想いは、いつまでも重ならないまま。
　二人でいる時、いつも誰かを探すように視線を彷徨わせていた。それに気付いた時の、あの絶望だって。知る必要はない、知らなくたって良い。
　全部全部、私一人のもの。
「あの、ね……シノちゃん。僕、シノちゃんから付き合おうって言われて、凄く嬉しかったんだ。これは、本当」
　躊躇いながら、それでもはっきりと、彼はそう言った。
「好きって言ってくれて、有り難う。デートだって楽しかった。次はどこに行こうかって、言ってくれたそれが凄く楽しみで――多分、僕は」
　そうして、彼は。
　彼は、
　彼は――
　とても残酷な事を、言った。
「僕、シノちゃんの事を好きになってた」
「……それは、光栄だね」
　泣くな。
　泣くな、自分。
　泣くな、嘆くな、歎ずるな。涙を見せずに全てを飲んで、いつものようにただ笑え。
「でも――イズミちゃんに告白された時、本当に、泣きそうになって。だって、そんなの、考えてもみなくて、何の冗談だって」
　笑え。
　もう何度目かも判らない、それは最後の意地だった。
　深晴が言葉を続ける。流れはもう、止まらない。

　止める心算も、ない。
「でも――だから、ごめん。僕――」
「まぁ待てよ、トキワ」
　止める事は出来ない。
　だからほんの少しの間だけ、私はそれを遮った。
　驚いたように、深晴が瞬く。
「シノちゃん……？」
「うん。まぁ、ちょっとだけ待て」
　ひょいと、肩を竦める。何でもない事のように。
　そう、何でもない事だ。
　こんなの。
「まさか君、私に、一ヶ月間――いや、一ヶ月もないか。そんな短期間でフられた女だなんてレッテルを貼る心算？」
「え、えぇ!?　違、そんな事――」
「大体！」
　ぎょっと眼を瞠る少年に、一気に捲し立てる。
「大体、今まで言わなかったけど、君はその辺への配慮が足りなさ過ぎるんだよ。付き合い始めたって、デートには誘って来ないし――あの時は、楽しかったけど。前までと何も変わってないじゃないか。甲斐性って言葉、知ってるか？」
「ご、ごめん……？」
　面食らった深晴がよく判らないまま謝罪の言葉を口にするのも無視して、私は続けた。
「体育祭ではずっこけるし、合唱祭では音を外すし、文化祭じゃ猫の手にもならない！　英語と数学は赤点ぎりぎりだし、幾ら教えたって覚えやしない。いつもいつも、同じとこ何回やってるか、判ってるか？　お陰で、何でか私の成績が上がったわ！　……まぁ国語の成績はトップだったし、茶道やってるとこは格好良かったけど」
　矢継ぎ早に、彼が何かを言い返すよりも早く。
「それこそあんた、根暗過ぎるっつの。今時かつあげとか、はっ、何？　会話はへったくそだし平凡顔だし鈍臭いし地味だし融通は利かないし。挙げ句の果てには幼馴染に告白されただぁ？　ふざけんのも大概にしろよ。それで負けそうになってる私、何なんだって。マジ、何回も何回も思ってたけどさ、お前はちょっとオンナノコノキモチを理解した方が良い」
　笑え。
　笑え。
　笑え――！
「普通に、友人として付き合うには良い奴だけど、そこまでだね。しかもそんな奴にフられそうになってる自分、何？」
　深晴はもう、何も言わなかった。だから私は、最後の一言を放つ。
「君みたいに詰まんない男、――こっちから願い下げだっつの、ばか」

呆気なく、素っ気なく、言葉は古びたコンクリートに落ちて、余韻も残さずに消えた。
散々馬鹿にされてフられた筈の深晴は、ただ言葉を失って、申し訳なさそうに佇んでいるだけだった。私は眉を寄せた。
「だから、そんな顔すんなっつの！　君は私の趣味じゃない！」
言いながら、ずかずかと近付く。その胸倉を引っ掴んで、私はぐいと引き寄せた。
「イズミの事――泣かしたら、泣かすからな」
「シノちゃん……」
深晴はきょとんと眼を見開いて、それからふわりと微笑んだ。……そんな顔、される謂われはないのだけれど。
身を離して振り返ると、見慣れた少女が立っていた。会話を聞いていたのかいないのか、硬い表情からでは判らない。
背中で、深晴が声を上げた。
「イズミちゃん」
呼んだ、声音。
それを聞いた瞬間、私ははっきりと己の敗北を悟った。
だって、なぁ。
私の名前を、そんな声では呼ばないでしょう、君？
泣けば良いのか、笑えば良いのか、それともその両方なのか――頭の中はぐちゃぐちゃで、ただ私は最後の意地で微笑んだ。
「お別れだ、ミハル。……まぁなかなか、楽しかったよ」
誰よりも大切な親友の隣を横切って、屋上の入り口へ向かう。出入り口を潜る瞬間にちょっとだけ振り向いて、私は叫んだ。
「一生やってろ、この、バーカ！」
捨て台詞のように吐き捨てて、中に入った瞬間に勢いよく扉を閉める。そのまま屋上への扉に背を預けて、ずるずると座り込んだ。外の二人は、暫く出て来ないだろう。
へたり込む私の横で、一人の少年が壁に寄り掛かっていた。
「……で、考えてくれたか？」
にやりと口角を上げる圭に、私は返した。
「一昨日来やがれ」
「酷っ！」
気分を害した様子もなく、からからと笑う。それを捨て置いて、私は天井を見上げた。
「あぁ……」
声は湿っている。視界が滲んでいた。
「アホらし」
呟いて、笑う。失った初恋を想って、私は少しだけ泣いた。

呆れるくらい、君に恋してた。